

## 放牧地における刈取による「リードカナリーグラス」の抑圧法

イネ科牧草の一つであるリードカナリーグラスは、窒素成分の施用を制限し多回刈りを継続的に実施することで抑圧が可能である。

農業研究センター 草地畜産研究所 (担当者: 黒柳 智樹)

## 研究のねらい

イネ科牧草の一つであるリードカナリーグラスは、地下茎により面的に増殖し他の植生を被圧する、アルカロイドを含有するため嗜好性が低い、冬枯れを起こす等の理由から、永年性草地に侵入した場合、草地の放牧利用、特に、冬季・周年放牧の普及を妨げる一因となっている。

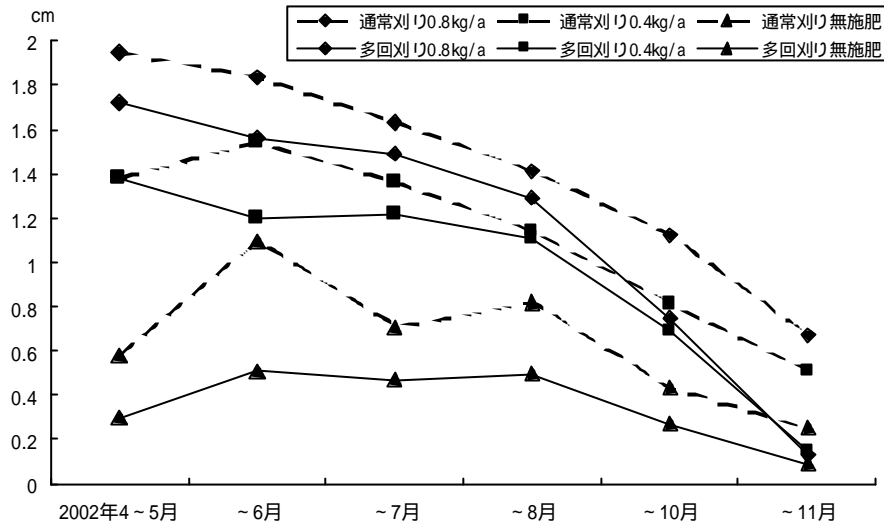
そこで、刈取りによるリードカナリーグラスの増殖を抑圧する手法を確立し、永年性草地の放牧利用を促進する。

## 研究の成果

1. 日伸長量に及ぼす処理効果については、多回刈り区で伸長量が小さくなり、施肥量の制限に準じて低下する傾向を示した。また、施肥効果は4～6月が最も優れ、8月以降は急速に低下した。
2. 乾物収量については、いずれの年次においても多回刈りで低収となり、施肥量の制限に準じて減収となる傾向を示した。特に、多回刈り・無施肥の組合せ処理区での収量が最も少なく、被度率も35.9%にまで低下した。
3. 茎数については、いずれの年次においても多回刈り区で少なく、施肥量の制限に準じて減少した。特に、多回刈り・無施肥の組合せ処理区の減少率が69%と最も著しい減少を示した。
4. リードカナリーグラスは、窒素成分の施用を制限し多回刈りを継続的に実施することにより抑圧が可能である。

## 普及上の留意点

1. リードカナリーグラス抑圧後の草地には、雑草の侵入や一部裸地が見られるため、牧草の追播による植生の回復が必要となる。
2. リードカナリーグラスは、8月以降の肥効が低下するため、放牧地において他の牧草の伸長を促すためには、秋季の施肥法について検討する必要がある。



第1図 利用3年目における日伸長量の推移

表1 リードカナリーグラスの乾物収量の年次別推移及び被度

刈取	処理 施肥水準	乾物収量 (kg/a)				被度 (利用4年目)
		初年目	2年目	3年目	4年目	
通常刈り	0.8kg/a	170.4	232.9	198.0	131.3	100%
通常刈り	0.4kg/a	137.1	158.4	145.2	93.3	99.5%
通常刈り	無施肥	82.8	85.0	60.0	44.7	82.3%
多回刈り	0.8kg/a	105.1	160.1	125.1	88.4	51.8%
多回刈り	0.4kg/a	77.2	157.3	90.5	74.8	64.0%
多回刈り	無施肥	59.2	64.2	31.5	25.6	35.9%

通常刈り処理 春・夏・秋の年3回刈り 多回刈り処理 4~11月にかけて年5~7回刈りを行う  
施肥水準 a 当たりの窒素成分の施用量、施肥は刈取り毎に実施

表2 リードカナリーグラスの茎数の年次別推移

刈取	処理 施肥水準	利用 開始時	茎数 (本/m <sup>2</sup> )				減少率
			初年目 平均	2年目 平均	3年目 平均	4年目 平均	
通常刈り	0.8kg/a	781	821	613	618	537	31.2%
通常刈り	0.4kg/a	843	884	488	522	537	36.3%
通常刈り	無施肥	768	779	367	305	284	63.0%
多回刈り	0.8kg/a	796	1,188	712	498	326	59.0%
多回刈り	0.4kg/a	821	1,124	848	413	425	48.2%
多回刈り	無施肥	733	1,081	537	156	227	69.0%

減少率 = (利用開始時 - 4年目) / 利用開始時

通常刈り処理 春・夏・秋の年3回刈り 多回刈り処理 4~11月にかけて年5~7回刈りを行う  
施肥水準 a 当たりの窒素成分の施用量、施肥は刈取り毎に実施